

北斗七星<sup>ほくとしちせい</sup>

ウクライナ

いつのころか、はるかな昔。どことははっきりわからないけれど、たいへんな日照り<sup>ひで</sup>がありました。川や湖<sup>みづうみ</sup>だけでなく、井戸<sup>いど</sup>の水さえかれました。人びとは、水がないので、みな弱<sup>よわ</sup>りはてっていました。

この村に、ひとりの女の人<sup>むすめ</sup>がいて、娘とふたりで住んでいました。女の方は、水がないせいで病<sup>び</sup>気<sup>き</sup>になり、ベッドから起き上<sup>お</sup>がれなくなりました。娘は、お母さんを死<sup>し</sup>なせまいとして、水差<sup>みずさ</sup>しを持って、水をさがしに出かけました。

娘は、歩きに歩きました。そして、水を見つけました。どこで見つけ出したものか、だれも知<sup>し</sup>りません。でも、ともかく見つけたのです。娘は、水を水差しに入れて、うちへともどつていきました。

とちゅうでひとりの男の人に会いました。男の方は、のどがかわいて死にかけていました。娘は、水を一口飲<sup>の</sup>ませてやりました。男の方は、起きあがってお礼をいいました。先へ歩いて行くと、またひとり男の人に会いました。娘はその人にも水を飲ませてやりました。こうして、三人目、四人目、とうとう七人目と、男の人たちに水を飲ませて命<sup>いのち</sup>を救<sup>すく</sup>いました。お母さんと自分のための水は、あと、ほんの少し、水差しの底<sup>そこ</sup>にあるだけでした。

歩いて歩いて歩いて行って、ひと休みしようと、娘は道ばたに腰<sup>こし</sup>をおろしました。水差しをそばに置<sup>お</sup>いたとき、どこからともなく犬があらわれました。犬は、水が飲みたかったのでしょうか。水差しにとびついて、ひっくり返してしまいました。

すると、水差しの中から七つの大きな星<sup>ほし</sup>と、八つ目に小さな星が飛<sup>と</sup>び出して、天にのぼりました。七つの星は、娘が水を飲ませた男たちの魂<sup>たましい</sup>で、八つ目の小さな星は、水差しをひっくり返した犬の魂でした。

神さまは、娘の心がどんなに清<sup>きよ</sup>らかなのか、すべての人に見えるように、星を天にとどめました。そして、大地に雨をふらせました。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の太陽を月と星の民話』日本民話の会・外国民話研究会編訳／三弥井書店